様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０１４５６

研究課題名（和文）「クーデタ後」の政軍関係の比較政治史的研究－イベリア両国を事例として－

研究課題名（英文）The Comparative History of Civil-Military Relations after Coup d'etat: Iberian Cases

研究代表者
武藤　祥（Muto, Sho）

関西学院大学・法学部・教授

研究者番号：４０５０８３６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、スペインのフランコ体制とポルトガルの新国家体制の下での政軍関係とその変化を分析したものである。両体制は、いずれも軍事クーデタを契機として成立したものの、体制と軍との関係は対照的なものであった。この違いを生んだ要因を、主に政治アクターとしての軍に着目して解明することが本研究の目的である。
　本研究では、政軍関係論の理論を応用し、また一次史料を渉猟しながら、両国の政軍関係を比較の観点から分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　近年、比較政治学においては、権威主義体制およびその下での政軍関係に注目が集まっている。民主主義体制が徐々に権威主義化する中で、政軍関係も流動化する事態が頻発しているためである。
　本研究は、スペインとポルトガルを事例に、民主主義体制を打倒して権威主義体制が成立する過程、およびそこからの民主化過程における政軍関係の変化を分析したが、本研究の成果は、政治体制の変動期・流動期における政軍関係を分析する際にも有益な視座を提供するものと思われる。

研究成果の概要（英文）：　This research analyzes the civil-military relations (CMR) and its transformation under Franco regime in Spain and Portuguese New State. Although both regimes were established through military coup, the relationship between regime and armed forces were contrasting ones. The objective of this research is to clarify the causes of these differences focusing on the armed forces as a political actor.
　This research analyzes CMR in both countries based on the theory of comparative politics and the examination of primary documents.

研究分野：政治学

キーワード：スペイン・ポルトガル政治史　権威主義体制　政軍関係

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年の比較政治学においては、権威主義体制やそこにおける軍の役割に関して再び注目が集まっている。

本研究が対象とするイベリア半島両国(スペイン・ポルトガル)においては、19 世紀から 20 世紀初頭にかけて軍の政治介入が常態化していた。また、スペインのフランコ体制(1939-75 年)とポルトガルの新国家体制(1933-74 年)は、いずれも先行体制に対する軍のクーデタが発端となって成立した。

しかし、その後両体制は、軍との関係という観点から見ると、対照的な経緯を辿った。フランコ体制においては、フランコが自らの出身母体である軍を支配下に置き、体制と軍は一体化したことで、体制にとって軍は最も強固な支持基盤となった。他方、新国家体制においては、当初軍出身の大統領の存在もあって、体制と軍との関係は密接であったが、1951 年にカルモナ大統領が死去し、サラザールの実質的支配権が強化されてくると、体制と軍との距離が広まってくる。1950 年代末以降、植民地戦争の泥沼化という状況も相まって、軍は体制にとっての潜在的脅威となった。

こうした点を踏まえ、比較政治学における政軍関係論の枠組も踏まえ、両国の軍が、クーデタ後に成立した権威主義体制をどのように認識し、その認識に基づいてどのように行動したかを実証的に解明することが必要であった。

２．研究の目的

本研究の目的は、スペインのフランコ体制とポルトガルの新国家体制の政治史を、政治アクターとしての軍の動向に着目しながら再構築することである。また、そこから得られた知見を踏まえ、クーデタ後の軍の行動を類型化・理論化することを目指した。

本研究のより具体的な射程は次の通りである。第 1 に、スペイン・ポルトガルにおける権威主義体制の展開と、体制と軍との関係について、実証的に解明・分析することである。

第 2 に、これまでの政軍関係論を包括的にレビューし、実証的な政治史研究の成果に基づいて新たな理論的知見を提示することである。

３．研究の方法

以上の目的を踏まえ、本研究が用いた手法は以下の 2 つである。第 1 に、スペイン・ポルトガル本国での、体系的な史料調査である。研究代表者は 2019 年 9 月から 2 年間、スペイン・マドリードにて在外研究を行う機会に恵まれた。2020 年初頭から新型コロナウィルスの感染拡大による研究計画の遅延はあったものの、数度にわたる史料調査を行うことができた。主な調査対象は、スペインの総合軍事史料館(特にアビラ分館)と、リスボンの軍史料館である。

第 2 に、関連する二次文献の幅広い渉猟である。フランコ体制と新国家体制の政治史に関する文献、両国の政軍関係史に関する文献、そして比較政治学における政軍関係に関する文献がその対象である。

４．研究成果

本研究で得られた成果は以下の通りである。

(1)スペインとポルトガルの権威主義体制下における政軍関係の差異

フランコ体制は、スペイン内戦を経て成立したという事情もあり、個人としてのフランコにあらゆる権威・権力が集中した。この性質は、内戦終結後にも継承・強化された(武藤 2003)。その中で軍は、カトリック教会・単一政党 FET とともに、体制を支える「柱」として機能した。

1940 年代までの体制初期において、軍は左派勢力への弾圧などの治安機能を担い、体制の対内的・対外的生存に大きく貢献した。また、閣僚ポストなども一定数の軍人が占め、フランコ体制と軍はかなりの程度一体化していたといえる。ただし、1940 年代前半までは、軍がフランコに完全に従属していたわけではなく、フランコは軍内では「同輩者中の第一位」にすぎなかった。しかしフランコは、自身に匹敵しうる権威を持った有力軍人を少しずつ排除していき、軍内での立場を絶対化していった。そのことで体制と軍との関係も変化し、軍は体制の「忠実な伴走者」となっていく。

他方、1940 年代末には国内での反体制武力活動がほぼ終焉し、また 1950 年代には国際的孤立も解消し、スペインは西側諸国の一員として迎えられることになった。こうして対内的・対外的脅威が大幅に減ずる中、軍は軍事・防衛政策に専念するようになり、軍の非政治化が進んだ。

他方、ポルトガルの新国家体制においては大きく状況が異なった。1932 年にサラザールが首相に就任するが、軍は従属的な立場に甘んじたわけでなかった。体制と軍との関係は、軍出身である共和国大統領によってある種の均衡が保たれていた。共和主義的理念の強いポルトガル軍にとって、首相の任免権を持つ公選大統領が軍出身者によって占められているという点が、サラザール率いる新国家体制を受容できるポイントであった。

しかし、初代大統領であったカルモナが 1951 年に死去して以降、サラザールは軍出身ながらも自身に忠実な人物を大統領に据えるようになる。さらに 1958 年の大統領選挙で、空軍出身のデルガドが体制側候補に肉薄すると、サラザールは翌 1959 年の憲法改正によって大統領公選制を廃止した。このことによって体制は軍の志向する共和主義的性質を放棄し、軍の側からすると、大統領ポストの掌握を通じてサラザールの実質的支配に掣肘を加えることが不可能になった。

さらに体制と軍との関係を決定的に悪化させたのは、1960 年代以降の植民地戦争であった。ポルトガルは西欧諸国の傾向に反し、アンゴラやモザンビークなどの植民地の維持に固執した。激化する植民地戦争の矢面に立たされ、甚大な人的被害を出した軍内には、体制打倒の機運が醸成されていった。

(2)両国の政軍関係と体制移行の態様との関係

スペインの体制移行は、オドンネルとシュミッターによって「協定主義」と定式化され、平和裏でスムーズな移行のモデルケースと位置づけられた(スペイン・モデル)。「法から法へ」と表現されるように、権威主義体制からの連続性の高い移行であったこと、移行を主導したのが軍ではなく文民であったことは疑いえない。文民勢力も軍の動向には常に細心の注意を払っていたし、軍も移行期に争点となった諸改革については強い関心を示していた。

他方ポルトガルでは、1974 年 4 月に「カーネーション革命」によって新国家体制が打倒された。この蜂起は、新国家体制に不満を持った軍内の一部勢力によって担われ、軍はその後も移行過程において主導的役割を果たした。すなわちスペインと比較すると、権威主義体制からの移行は断絶という性質が強く、その主体が軍であったという点が対照的である。

スペインにおいては、軍は権威主義体制とかなりの程度一体化し、反動的・保守的な価値観(反共産主義、国家の一体性の重視など)を護持してきた。移行期に進められた政治改革はこうした軍の価値観をことごとく否定するものであり、軍は当然移行過程と、その結果生まれた民主政に対し、敵意を抱かざるを得ない。すなわち民主政の側からすれば、①自身と相いれない価値観を持ち、かつ②(フランコ体制の下で非政治化が進んでいながらも)改革に対し介入し、場合によってはクーデタなどの実力行使をも辞さない姿勢を示す、すなわち移行過程で急激に政治化した軍に対し、いかに民主政や民主的な価値観への敵意をやわらげ、かつ組織的・制度的にもいかに文民統制を確立するか、という点が課題になる。

他方ポルトガルの場合、権威主義体制への不満を募らせ、最終的にその打倒へと至った軍は、同時に自ら「統治者」として中長期的に移行過程を主導することを想定していた。結果的には軍が政治に直接的影響力を行使した期間は短かったが、民主主義の観点からすると、いかなる価値観を有していても、軍が政治過程を主導し、その後も後見的な立場にとどまるのは好ましくない。すなわち、軍をいかに政治の舞台から遠ざけ、「兵舎に戻す」か(軍を非政治化/脱政治化するか)が課題になった。これをまとめたものが下の表である。

イベリア両国における移行期の政軍関係

	権威主義体制における政軍関係	移行の態様	移行初期における軍の動向	移行初期から後期の課題
スペイン	体制と軍が相当程度一体化	文民が主導	諸改革に反発した軍が急速に政治化	軍の非政治化 文民統制の確立
ポルトガル	体制と軍は徐々に対立的関係へ	軍が主導	軍が移行を主導し政治と一体化	軍を「兵舎に戻す」 文民統制の確立

出典：著者作成

以上が本研究の成果の概要であるが、次に本研究の位置づけ・インパクト・今後の展望について述べる。

先に述べたように、近年の比較政治学においては、権威主義体制とその下における政軍関係に注目が集まっている。現在は、本研究の対象のように、軍事クーデタから民主主義体制が崩壊し、権威主義体制が成立するという事例は稀になってきているが、ある政治体制が権威主義化し、その過程で政軍関係も不安定化するという現象がしばしば見られる(トルコ、ブラジルなど)。本研究の成果は権威主義体制からの民主化における政軍関係を分析したものであるが、民主主義体制からの権威主義化という、政治体制の流動期における政軍関係の変化の把握・分析に際しては、本研究で得られた成果が有益な視座を提供するものと思われる。

今後は、本研究で得られた成果について、さらに精緻な理論化が必要であろう。先述の通り、本研究で扱ったスペイン・ポルトガルにおいては、権威主義体制の成立とそこからの民主化のいずれの過程においても、軍が主体的な政治アクターとして関与した。他方、近年の権威主義化過程においては、文民体制の権威主義化に際し、軍はやや受動的な立場に置かれている。堅固な文民統制が確立されている現代において、政軍関係の変化を分析する際の理論枠組について、本研究の成果も踏まえ、比較の観点に基づき構築することが求められよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 武藤　祥	４．巻 106
２．論文標題 ヨーロッパ「周辺」における戦間期の危機－比較研究のための予備的考察	５．発行年 2022年
３．雑誌名 立教法学	６．最初と最後の頁 345～362
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 武藤　祥	４．巻 35
２．論文標題 フランコ独裁における国家の運営・国民の形成－近年の比較研究の紹介	５．発行年 2021年
３．雑誌名 スペイン史研究	６．最初と最後の頁 12～18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　3件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 武藤　祥
２．発表標題 1920年代の権威主義化－近代と現代のはざまで－
３．学会等名 日本比較政治学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 武藤　祥
２．発表標題 権威主義－民主主義の対概念か？
３．学会等名 日本政治学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Sho MUTO
２．発表標題 The Authoritarian Revolution? The Third Way of Alternative in the Inter-war Period
３．学会等名 Political Outbreaks Against the Liberal Order (1917-1940): Practice and Celebrations（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 武藤　祥
２．発表標題 研究動向：フランコ独裁における国家の運営・国民の形成－近年の比較研究の紹介
３．学会等名 スペイン史学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Sho Muto
２．発表標題 Las dictaduras ibericas desde el punto de vista del desarrollo politico
３．学会等名 I CONGRESO INTERNACIONAL DERECHAS, HISTORIA Y MEMORIA: TEORIA Y PRAXIS DE LAS DICTADURAS EN EL PODER（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 武藤　祥
２．発表標題 民政移管の態様と文民統制との関係 ースペイン・ポルトガルの事例から
３．学会等名 日本比較政治学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Sho Muto
２．発表標題 La dictadura constitucional? Constitucion del Estado Novo y Leyes Fundamentales del Regimen de Franco
３．学会等名 Programme POST-DEMA（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 武藤祥
２．発表標題 ポストグローバル時代の権威主義？-権威主義体制か権威主義的状況か
３．学会等名 日本大学法学部政経研究所研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

１．著者名 森井 裕一(編)、武藤祥、山田文比古、八十田博人、正躰朝香、村田奈々子、五月女律子、仙石学、小川浩之、その他	４．発行年 2022年
２．出版社 有斐閣	５．総ページ数 358
３．書名 ヨーロッパの政治経済・入門〔新版〕	

１．著者名 岩崎正洋、松尾秀哉、岩坂将充(編著)、武藤祥、山尾大、網谷龍介、岡部恭宜、外山文子、金谷美紗、高岡豊、本名純、その他	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 226
３．書名 よくわかる比較政治学	

１．著者名 Carlos Domper Lasus and Giorgia Priorelli (eds.), Sho Muto, Giovanni Orsina, et al.	４．発行年 2023年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 230
３．書名 Comibining Political History and Political Science	

１．著者名 岩崎正洋(編)、武藤祥、杉浦功一、柄谷利恵子、成廣孝、吉田徹、藤嶋亮、松尾昌樹、西岡晋	４．発行年 2021年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 282
３．書名 ポスト・グローバル化と国家の変容	

〔産業財産権〕

〔その他〕

https://www.casadevelazquez.org/es/la-casa/calendario-de-actividades/investigacion-cientifica/novedad/a-traves-del-espejo-populista/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関